

カーライルの4つの基本思想概念

松藤 亨

*倉敷芸術科学大学

(1998年9月30日 受理)

I 生涯・作品概観

Thomas Carlyle は南スコットランドのエクレフェカン (Ecclefechan) という寒村で、1795年に生れ、ロンドンのチェルシー (Chelsea) の家で1881年85歳でこの世を去った。彼の父 James は学は余りなかったが、信心深く厳格勤勉な石工であった。この父は後妻を迎えて9人の子供ができた(5人の娘と4人の息子) その9人の中の第1子がトマス・カーライルである。彼の母は単純敬虔な信心深い女性で、その知的愛情をまごころこめて一生子女達に注ぎ、夫の聖書的厳格さからくるやさしさの不足を彼女のこまやかな愛情とやさしさで補っていた。母は早くもトマスの中に天才を見付け、それが発展してゆくのを予見し、彼の長い人生に於ける不安、葛藤、困難の中にあつて、偉大な支えとなったのである。彼は父からはまじめな正直な性格と勤勉さを受けつぎ、母からは特に信心深さと優しさを学びとっていった。両親はこの学問好きな子供をキリスト教の牧師にすべく、エジンバラ大学にやったが、彼は牧師にはならなかった。が、宇宙を教会とし、自然をバイブルとし、文筆講演の場を説教壇として広く自由に新思想を語り教え、知識人の精神的渴望を癒し、時代の予言者、先達となっていったのである。後年彼は70歳の時、エジンバラ大学の名誉総長 (Lord Rector) に推薦され、有名な就任演説 (On the Reading of Books) をしたのである。ところが皮肉にもこの光栄の中にいた時、妻 Jane が彼が買い与えていた四輪馬車の中で急死したのである。カーライルの痛恨は深く、その後筆を取る力もなくして死ぬまで妻を慕い、その霊に忠誠を尽くしていったこの老文豪の姿は感銘深いものがある。前後するが、大学を出たあと彼は学校教師 (主に数学教師) として数年を過ごしたが、その仕事にも失望し、それから家庭教師や翻訳をしたが、それにも満足できなかった。その数年前結婚した Jane Welsh がもっていた Scotland の人里はなれた淋しいクレーゲンパトック (Craigenputtoch) の家に退去して、7年間読書と思索に専念した。その間、ドイツ文学、哲学から特にゲーテ (Goethe) から深い影響を受け、その紹介にも努めた。彼は不眠と消化不良に苦しむことがあったので、健康を整えるため、乗馬を楽しむことがよくあった。又 Edinburgh Review に寄稿したりして、生活の糧を得たりした。だんだん思索思想も深まり creative spirit も溢れ出してきて、それを本の形で表わさずにはおれなくなってきた。その本が彼の処女作といえる最も有名な *Sartor Resartus* (衣裳哲学) であり、文学の世界に

入ってゆくスタートとなったのである。

その後彼は妻と共にロンドンのチェルシーに居を構えて、次々に著作出版をしてゆくことになった。そして思索、批評、思想をひろげ深めてゆき、*The French Revolution; Heroes and Hero-Worship; Past and Present; Oliver Cromwell's Letters and Speeches* と書き続け、当時の英国の社会事象問題にも心を砕いて警告の意味もこめて *Latter-Day Pamphlets; Signs of the Times* などを書き、又人物描写としてすぐれた *Life of John Sterling* など、そして後年の大作 *History of Frederick the Great* 全6巻に取り組み、苦心惨憺の末、書き終えた。その後先述のエジンバラ大学の名誉総長に推薦されたのである。妻の死後10余年生き伸びて、妻や父を偲んで *Reminiscences* など死ぬまで書き続けたのであるが、1881年2月5日、85歳で息を引き取ったのである。国民的著名人が祀られる Westminster 寺院に彼も埋葬されることになったが、彼はこれを辞退し、その遺体は彼の希望でスコットランドのエクレフェカンの教会墓地の両親の墓碑のかたわらに雪降る中に埋葬されたのである。彼の生前の希望で教会での葬儀は行われなかった。

II 4つの基本思想概念

カーライルの主要な見方、考え方を4つにまとめてみると、先ず第一に

1) **Strong Religious Sense in Life** 人生には強力な宗教感覚が必要であるという考えである。個人の自由を尊重した Church of Scotland から分離した Burgher Seceder というキリスト教の一派に属した信仰熱心な両親の下、強い宗教的影響を受けて育った彼は大学で色々な思想哲学にふれ、幼時からの信仰はゆらぎ、変化はしたが、それを捨てるのではなく、新しい意義を探究し、新たに編成しなおしてゆき、その強い宗教的感性は一生変わらず the Invisible (目に見えないもの) への洞察信徒, Deeper Mystery (より深い神秘) への感知敬服の念は彼の作品の根底にある。父 James にとっては宗教は人生の北極星であることをトマスはよく知っていた。彼の魂の道程は *Sartor Resartus* の中心をなす3つの章に記述されている。永遠の否定 (Everlasting No) の章では機械論的人生観に影響を受けた悲観論を脱却している。この章で宇宙は「巨大な死物だ、計量できない蒸気機関車である。何のおかまいなしに回転しながら、私の四肢五体を引きさく」という恐ろしい幻想から進んで、無関心の中心 (Centre of Indifference) で、つまらぬ悲観論には挑戦してみよう、物事に囚われない良い意味の無関心 (Indifference) の客観的覚りの態度をとるように努め、遂に永遠の肯定 (Everlasting Yea) に到達する。徒らにあとずさりばかりしてはならない。自ら起って分担すべき義務、即ち神に課せられた義務がある事に目覚めるのである。「恐ろしい無限の只中にある弱小の個」(a feeble Unit) である自己から、己の立場を分析して、積極的な使命を自覚して、新しい力を得るに至ったのである。その要諦は“Love not Pleasure, Love God” という Maxim であった。トイフェルスドレックのカーライルは8世紀には貴重であったキリスト教も18世紀にはもはや通用せぬことを悟るのである。しかし彼

はそれを投げ捨ててしまわずに、むしろそれに新しい意味を持たせる仕事に心を向けた。時代に適した新しい道具と装いを以て、立て直した教条に神聖な神の息吹を吹き込むことに努め、危く亡びようとしていた人間の魂が救われるようにと心がけた。この Sartor の中に記された魂の苦闘のあと、カーライルは一般人間の世界に立戻って、人生はある宗教的な力に負うところ大なること、人生には人と人との関係に於て、又社会的義務責任の問題に於て、更に知的論議の間に於て、単なる機構だけで量られない、外見に訴えることでは理解できない遥かに複雑なものがあることを知らねばならないと主張したのである。併しながらどんな立派な確信もそれが行動にならなければ価値がないのである。彼の思想に於て第2の重要な要素が“An earnest toilsome life”から生れる。

2) **Importance of Action** 行動の重要性は彼が勤勉な父から直接学んだ尊い教訓でもあった。そもそも人間は働くために創造された“Man was created to work.”という事を信じ、彼は賢明に倦むことなく急がず、しかし休まず働き続けた。強いカルビン主義神学の宗教的組織の中で育ったので、全てを知り、全てを支配し給う神に対し、個人的報恩の義務があることを生涯忘れることはなかった。人間はその一つ一つの行動に於て、神に対する責任を負わねばならない。聖書と教会の約束と規定に従って、神意に叶う救いの達成に努力しなければならない。この様に神に対する義務の意識が強く働いて、彼は一生、勤労の生涯をつらぬいたのである。カーライル家一族は、労働がひとり生活のための必要からと考えていただけではなく、これは神の定め給うた運命の一部と信じていた。カーライルもこの家族の型にはまっていた。精力的な著作活動は勿論生計のための収入稼ぎではあったけれども、クロムウェルやフレデック伝の如き、殆ど人力には不可能と思われる大業を為し遂げた驚くべきエネルギーもこの強い勤労の義務感があったからである。更に広く手紙を書いたり、いろいろな手段で親類や友人の援助をしたりして、種々様々な仕事に献げた彼の勤労はこの信条の無言の証明となっている。“Gospel of Work”を説いた彼は、この様に死ぬ迄書き続けたのである。この勤労尊重の思想は日本人の勤労を大事にする伝統的考えに似たものがある。併し、当時の社会問題に対応するには、この勤労の福音だけでは不十分であった。カーライルのより成熟期の著作に於てはもう一つの重要な思想と組合せで始めて彼の数多くの政治評論が理解できよう。そのもう一つの思想とは、

3) **Respect for Order** 秩序の尊重である。秩序を社会的、自然的、靈的の3面より解説、神の靈(秩序)の具現としての自然を觀じ、奇跡も靈的高次元の秩序の中では自然と見^な做されうる哲理を考究し、“秩序なくして社会なき”(Without order, no society)秩序の肝要さを説いた。カーライルは父親の生きた勤勉な姿より社会秩序の基盤としての“労働の福音”を学び、師と仰いだゲーテの説く良心の内奥にある道徳律なる小宇宙を靈的秩序の中に瞑想した。そして *Past and Present* を秩序の観点より著述して、修道院主サムソン

が低迷していた12世紀の修道院を靈的秩序の回復強化により、如何に改革復興したかを説いたのである。*Sartor Resartus* (Book III) の“Natural Supernaturalism”では、人知の限界を悟り、神の全能への信仰により奇跡も靈的高次元の秩序の中では自然と見做しうる哲理を啓示している。転じてアーノルドの *Culture and Anarchy* では、「秩序なくして社会はなし」“Without order there can be no society.”の秩序の肝要を考究し、その宗教的頂点としての名言、「イエスは永遠の秩序の中に住み給い、その永遠なる秩序は永遠に滅ぶことなし」“Jesus lives in the eternal order, and the eternal order never dies.”を提示しているのである。この秩序の重要性にもう一つ加えてカーライルが特に力を入れて教え説いているのが、次の第4の要素である。

4) **Role of Heroes** 英雄の役割である。カーライルのいう英雄とは文武の道にすぐれて強きリーダーというよりは、人生の神的意義とその実相を見抜き、見えざる天(神)からの声を聞きわけうる魂の持主、所謂“誠意”の人の意味である。この神に選ばれた leaders に人々は進んで従うべきで、さもなくば、chaos や anarchy が生ずると警告した。英雄崇拜は誠実にして偉大な心には生れつき備っている高貴な忠誠の心であり、人類がこの世に存在する限り、生き続ける心である。神の子としてすべての人が英雄心に生きる時、その国は栄え、その心すたる時、人間世界は衰退滅亡に向かうとカーライルは警告する。

彼によれば、この世で人間が為しえたものの歴史は根底に於て、そこで働いた偉大な人々—英雄の歴史である。この解釈の下にカーライルは宗教と自然崇拜(Nature Worship)の英雄としてOdin；予言者(Prophet)の英雄としてMahomet；詩人(Poet)のそれにDante, Shakespeare；司祭(Priest)のそれにLuther, Knox；文人(Man of Letters)のそれにGoethe, Johnson, Rousseau, Robert Burns；王(King)の英雄にはCromwellとNapoleonをあげ、夫々の英雄の心と働きを解明している。英雄の中の英雄(Hero of heroes)としてJesus Christを取り上げているのも意義深いものがある。

人類の生きゆく秘密であり、この世で最も肝要なこの英雄崇拜の心は、カーライルの如き純粹誠意の人にしてよく開陳できるものであり、その意味で万人英雄の社会こそ、カーライルの説く理想社会といえよう。我々こそ第7の英雄たりうる光栄が与えられているのである。“We may be 7th Heroes.”

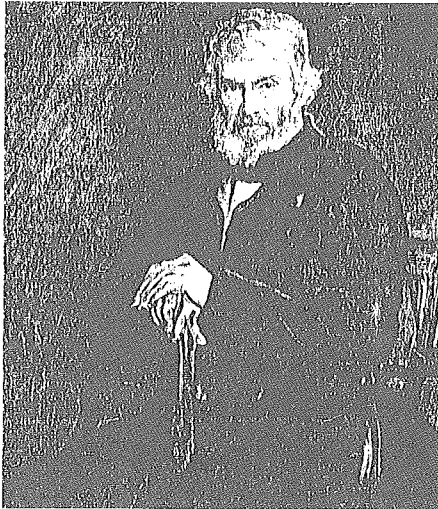
“There is in Man a **HIGHER** than Love of Happiness.”と説いた彼は、人間として落度も悩みもあり、葛藤矛盾もあったが、Apocalypse of Natureとしての文学でHigherなるものを求道し、教えた一英雄といえるであろう。カーライルは歴史家、評論家として知られるようになったが、もはや名声はそれだけでなくなっていた。まさに文字通りの「チェルシーの聖者」(Sage of Chelsea)となって、父Jamesが自分のためにくれたと同様に、同時代の人々に対して、良き模範を示し、又激励の言葉を与えていったのである。そのメッセージも複雑性もち始め、19世紀も進むにつれて、英国の社会情勢も良くなってき

た時代の変化に適應して、彼の思想にも發展があり、その深まった思想は、彼自身の境遇が貧窮と無名の存在から、チェルシーの聖者ととなえられる世界的高名に達するまでの間に経験した人生の紆余曲折から生れたものであることを理解しなければならない。彼こそは人間が真に心を配らねばならないものは何であるかを探究した人であったのである。彼こそは、世人が見逃し易い悪弊悪習に社会の目を向けさせ、改善した人であった。妻 Jane との間に時折いさかい誤解もあったが、彼の父が己の模範であったように自分も世の模範となるような生涯を生きようと努めた人であった。George Eliot は「今の我々の世代に於て、優れた活動をしている人で、カーライルの著書に影響を受けない者は殆どいない。」

“There is hardly a superior or active mind of this generation that has not been modified by Carlyle's writings……”と述べているが、現代の私共も彼と共に“Sanctuary of Sorrow”「悲哀の聖所」としての人生を更に深く洞察してゆき、迷いつつ躓きつつ進む人生航路にも、何時も変らざる北極星の不動の真理の光が、あの時この時、危機にあってまばたき光って (Twinkling of Truth) 我らに行くべき道を指し示してくれる様念願する者である。

参考文献

- 1) イアン・キャンベル著、多田貞三訳、1981：トマス・カーライル、成美堂、東京（主要文献）
- 2) トマス・カーライル著、多田貞三訳、1986：追想ジェーン・ウエルシ・カーライル、山口書店、京都
- 3) Ian Campbell, 1974：Thomas Carlyle, Harmish Hamilton Ltd, London
- 4) Lous Cazamian, 1932：Carlyle, The Macmillan Company, New York
- 5) T. Matsufuji, 1983：カーライルその Moral Energy, 京都あぼろん社
- 6) A. Abbott Ikelder, 1972：Puritan Temper and Transcendental Faith——Carlyle's Literary Vision, Ohio State University Press, USA



(1795~1881)
Sage of Chelsea

THOMAS CARLYLE

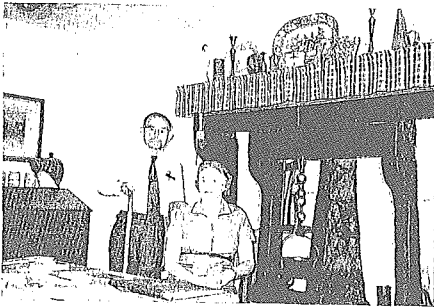


Portrait by
J. G. Carter



Jane Baillie Welsh
結婚の年 1826年
(25歳)

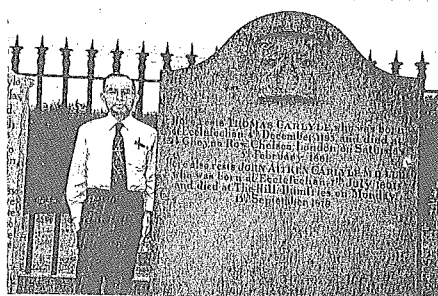
Bonded by Providence
カーライル 4つの基本思想概念



With Mrs. Nancy Walter, curator and the
stick Carlyle used in my hand.
The inside of Carlyle's Birthplace,
Ecclefechan. (1984)

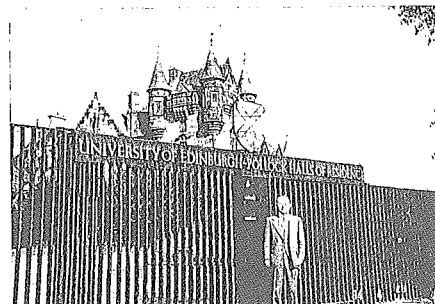


The desk Carlyle used,
Carlyle's House, London (1984)



The grave of Carlyle, near his parents'
grave, Ecclefechan, Scotland, his
birthplace.

(I was filled with grateful emotion,
July 11, 1984)



Pollock Halls of Residence of University of
Edinburgh where I stayed for a year.
(1984)

Carlyle's Four Basic Thoughts and Concepts

Toru MATSUFUJI

**Kurashiki University of Science and the Arts,*

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1998)

Thomas Carlyle (1795–1881) was born in Ecclefechan, Scotland and died in Chelsea, London at the age of 85. His basic way of thinking and viewpoint may be summarized into the following four points. **1) A Strong Religious Sense in Life.** He was raised in the pious and faithful home belonging to the Burgher Seceder detached from the Church of Scotland. He cultivated deep insight into the Invisible and esteemed the deeper Mystery. In *Sartor Resartus* his spiritual pilgrimage is described, proceeding from “Everlasting No” via “Centre of Indifference” to “Everlasting Yea”…… self-awakening with the maxim of “**Love not Pleasure, Love God.**” He renewed and re-interpreted the traditional religion with broader and deeper insight. “Worship of Sorrow” was in his deep faith and philosophy. **2) The Importance of Action.** His father, a diligent serious mason, gave his son Thomas a good example of industry in “an earnest toilsome Life.” He believed that “Man was created to work” and wrote many letters, aided relatives and friends in many ways and continued to write till he died. He preached “the Gospel of Work.” **3) Respect for Order.** He viewed order in three dimensions: social, natural and spiritual. Abbot Samson of St. Edmundsbury in *Past and Present* brought order back into a 12 c monastery. The Divine Order and Mercy is high above in Heaven and deep below in the Sanctuary of our heart. M. Arnold said that “Without order there can be no society.” Carlyle said that “Jesus lives in the eternal order, and the eternal order never dies.” **4) The Role of Heroes.** The hero, God-chosen soul of *Sincerity*, is intended by divine law to be head of the state. Real freedom is in obedience to the Heaven-chosen heroes. He chooses heroes in six fields: Nature worship – Odin; Prophet – Mahomet; Poet – Dante, Shakespeare; Priest – Luther, Knox; Man of Letters – Goethe, Johnson, Rousseau, Burns; King – Cromwell, Napoleon. “Jesus Christ is Hero of heroes.” We may be 7th heroes.

He taught that “There is in Man a HIGHER than Love of Happiness.” That is “Blessedness”. As Sage of Chelsea, Carlyle made efforts to offer and encouragement and example to his contemporaries as his own father had done to him. George Eliot esteemed him: “There is hardly a superior or active mind of this generation that has not been modified by Carlyle’s writings…….” I pray that “**Twinkling of Truth**” revealed by him lead our way from time to time.

* Kurashiki University of Science and the Arts part-time lecturer